

感想 思親の涙

一七〇

始めて宗を立て、宗が確立して始めて本門の戒壇も建立されるであらう。實に一天四海皆歸妙法末法萬年廣宣流布も五戒の實踐によつて始めて成立するであらう。今年宗祖入滅六百五十遠忌にあたつてこの時機適應化せる五戒を提唱してやまない次第である。

感想 思親の涙

遠 藤 養 宗

日蓮聖人の御生活を想像し來るとき、聖人程一生涯を通じて、父母に愛慕の情を捧げられし者は他にあるまい。「大孝は終身父母を慕ふ。」と、古の賢者孟子の言、今聖人の身上に於て、其の實を見る事が出来る。

懷へば身延入山後一ヶ年、文永十二年の二月十六日、即ち五十四回の御誕生日を迎へられし日であつた。懷かしの房州より海苔か届けられた。包を披く間おそしと、取り出して見れば、幼き時に見な

れし海苔と色形も同様で、而かも其のまゝの香り、幾度か聖人は手に取つて悦ばれた事であらう。聖人父母の事を思浮べられて、今は亡き両親を思ひ出された時、如何ばかり、悲歎の涙に衣を潤された事であらう。これにつけても聖人の大孝思親の程が思ひ浮べられる、御遺文の御眞情を緇くに、

「海苔一袋送り給ひ畢ヌ。(中略)郷ノ事遙ニ思ヒ忘テ候ツルガ、今此海苔ヲ見候テ、ヨシナキ心思出テ憂ク辛シ、片海市河小湊ノ磯ノ邊ニテ、昔見シ海苔ナリ、色形味ヒモ變ラザルガ、ナド我父母替ラセ給ヒケント、方違ヘナル恨メシサニ涙モ押ヘ難シ」(縮遺一〇八八)

と、當時の切なる様が良く拜せられる。更に聖人の追慕の御有様を推するに、

「今ニ生國ヘハ至ラネドモ、サスガ戀シクテ吹ク風、立ツ雲マデモ東ノ方ト申セバ、庵ヲ出デ、身ニフレ庭ニ立チテ見ルナリ」(全一四一八)

と。古語に、胡馬北風に寄り、越鳥南枝に巢ふと、鳥獸すらかくの如し、況ヤ人類ニ於てをやである。吹く風立つ雲までも東の方と申せば庵を出で、身にふれられし聖人の慕郷の情、如何に切々たりしかを知る事が出来る。それにて飽き足らず、遙か煙波の間よりなりとも故郷の両親の塚に回向せんものと、九ヶ年の間五十丁の嶮崖を一杖にたくして登られ、遙か伊豆、相模の山々を越へて懐かしき故郷を望めば、水天髣髴として幽かなり。あれこそ正しく我が故郷小湊であると、眺められた時、今は

世に無き父母を思ひ浮べて追慕の涙に暮れたのである。その地、今にのこる身延山上、霧立ち籠る奥之院思親閣である。

今にして昔のまゝ聳え立つ林陀利の峯は、六百五十餘年前の實情を永遠に物語る者である。その峯を朝な夕な仰ぎ見、且登りて當時を追想する時、我々は聖人の御靈に觸れ、涙に浴する事が出来る。聖人の御靈は永遠に身延の峯に棲み給いて、何時も思親の涙に暮れて居る。

親思ふ涙。其の涙こそ一切衆生を救はんとした聖人の慈悲に滿ちた涙にあらずして何んであつたらう。

(皇紀二五九一、九、一〇)

父母ぞなき人と語りて登りけり 我が袖ぬるゝ孝の坂道

以上

映畫布教に巡りて

梅 谷 英 學

數日來の雨つゞきも、今日はめづらしくからりと晴れた。時は日増しに暑さを加へて來た七月廿三